
夏ホラー2008短編集あれこれ

ミラージュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏ホラー2008短編集あれこれ

【Nコード】

N7131E

【作者名】

ミラージュ

【あらすじ】

夏ホラー2008「百物語」企画で執筆した短編やボツ作品詰め込みセットです。

看護の心得（前書き）

この作品はボツにした作品です。

自分で執筆してて『怖くないなあ』と思ってしまっていて……。でも、せっかく書いたので投稿してみました。

どうぞお手柔らかにお願い致します。

看護の心得

あれは三年前、私が県内でも有数の大学総合病院に看護師として勤めていた時の話です。

看護学校を卒業して初めて病院に採用された私は、研修を兼ねて様々な科の病棟に月替わりで配置されていました。

外科に始まり、内科、小児科、脳外科など色々な看護師の先輩や患者さんとの出会いで、最初はまともに血圧すら計れなかった私も次第に仕事に慣れてきて、自然な笑顔で患者さん達と挨拶が出来るようになってきました。

そして、私は研修の最後に精神科の閉鎖病棟に移動させられました。そこで私は、子供の頃からずっと憧れていたこの看護の仕事が恐怖で出来なくなってしまう原因となった『あの現場』を目撃してしまつたのです。

「山田さん、ご飯食べ終わりました？」

「……………」

「…………少し残しちゃったみたいですね、じゃあ、病室に戻りましょうか」

閉鎖病棟での看護の仕事は、私が想像していたものよりはるかに大変なものでした。精神科と聞いている程度 of 覚悟を決めて挑んだも

の、患者さんのほとんどの方は普通の人にはちよつと理解出来ない奇妙な一癖があり、中にはまともに会話や食事出来ない年配のお婆さんもいました。

病棟の廊下を一日中パタパタと歩き回る女性、自分が何故この病棟にいるかわからない失調症の男性、夜中に病室で奇声を上げて暴れるお爺さん、他にも病棟には十人くらいの患者さんが入院していました。

病状によつては他の患者さんと会わせる事が出来ない人達もいて、そういつた患者さんは入り口に鍵がつけられている個室に入れられて、廊下にあるトイレに自由に行けない代わりに各部屋に排出用のおまるが設置されています。それらを掃除するのも私達看護士の仕事、とてもハードな勤務内容でした。

でも、汚いなんてとも言つてられません。この仕事は私が自ら選んで就いた仕事ですし、患者さんの中でもある程度病状の軽い人達もいて、めつたに笑う事の無い患者さんから『いつもありがとう』と笑顔で感謝されたりすると嫌な事も忘れる事が出来ました。

そんな隔離病棟の中には、まだ小学生か中学生くらいの女の子達も四人いて、病棟の中央にあるホールでみんな仲良くテレビを見ながら絵を描いていました。

「みんな絵が上手いね？ 将来は漫画家さんになるの？」

「ううん、アニメクリエイターになりたいの」

楽しくお喋りしたり絵を描いている姿をみる限り見た目は普通の女の子達なんですか、みんな家族の人や他人と上手くコミュニケーションが取れなくなつてしまつた障害者、つまり引きこもりの子達なんです。今でいう、『腐女子』つてやつですかね。

学校に行く事を拒み、家でも親と会話をしたがらずに自分の部屋に閉じこもってしまう。それが手に負えなくなった保護者の方々がこの病院に入院させてきた訳です。

「あれ？ もう食べないの？ まだご飯もおかずもこんなに残っているのに」

「……食べたくない……」

その四人の女の子達の中でも、一人どうも臆病で精神状態が安定しない女の子がいました。彼女は極度の拒食症で、毎日三度の食事もいつもほとんど残してしまいます。時折何かに怯える様に震えだし、夜中に病室で大声を出して暴れ出す事もしばしば。

この病院に入院したきた原因は、どうやら学校で想いを寄せていた男子から『デブ』と言われて心を閉ざしてしまったそうなんです。私からはそんな太っている様にはとても見えない、長い髪が良く似合う可愛い女の子なのに。

「ちゃんとご飯を食べないと元気になれないぞ？ 元気になってここから退院して、酷い事を言ったヤツらを見返してやらなきゃ」

そんな少女にいつも優しい言葉をかけてあげる眼鏡の男性。私がこの病棟に来た時に教育係として指導してくれている先輩の看護士です。私のより五歳年上の男性で、明るく真面目な人でこの病棟のナースステーション内でもリーダー的存在でした。

彼とは夜勤のローテーションも良く一緒にいる事が多くて、精神科

での看護の仕方や入院中の患者さんの詳しい性格や行動、接し方などを色々指導してくれました。

誰にでも明るく挨拶をし、それがお年寄りの方でも子供達でも差別なく話しかけてあげる優しい人。新人である私にとっては、まるで教科書のような看護師さんでした。

しかし、私が女性だからそう見えるのか、患者さんに話しかける態度が少し強引な感じもありました。もちろん、私に話しかけてくる分には別には気にはなりませんでしたが、まだ幼くただでさえ精神が不安定な女の子達には若干嫌がられているようにも見えました。特に、臆病で心を閉ざしているあの子には。

「ほら、せめてこのご飯一口でも食べようよ、僕が食べさせてあげるから、さあ」

「……嫌っ!」

好きな男子にバカにされたせいなのか、彼女の男性嫌いは相当なものでした。この先輩看護師さんだけではなく、他にいる男性の看護師さんが話しかけても同じ様に近づかれる事を拒み、酷い時には錯乱して暴れ出してしまいます。

その為、ここにいる男性看護師のほとんどの人が彼女の周りの世話をする時はむやみに話しかける事は無く、目も合わさずに素通りして下手に刺激を与えないように振る舞います。

しかし、この先輩看護師さんだけは違いました。事ある毎に彼女の姿を見つけると、積極的にコミュニケーションを取ろうと近づき話しかけるのです。

「怖がらすにちゃんとお話をしようよ、もっと素直になって、今の自分の苦しみを僕達に話してよ」

「……………」

しかし、彼女は決して口を開こうとはしません。それどころか、その積極的な看護に怯え、彼から目を避けるようにベッドの上で丸まりガタガタと震え出すのです。このどうしようもない彼女の状態に、私達看護師も担当の医師からもあまり過度に刺激を与えないように注意されてはいるのですが……。

「先輩、あまりあの子に接しない方がいいんじゃないですか？ 下手に刺激して、この前みたいに暴れ出すと保護室に隔離しなきゃいけないりますし……」

ある日、いつもの様にその先輩と二人で夜勤の担当についた私は思い切って訪ねてみました。どうしても夜間は看護師の手も少なくなるし、医師の帰ってしまつて病院にはいません。もし、彼女が暴れ出してしまつたら他の患者さんにも影響が出るかもしれないし、そうなつたら経験の少ない私には対応が出来ない不安もあつたので……。

「何を言ってるんだ君は？ 僕達看護師までもが患者を避ける様になつたら、一体誰が患者さんを守ってあげられるんだよ？ 俺はあの子に早く良くなつてもらつて、ちゃんと周りの人達のコミュニケーションが取れる様になつてもらいたい、そして、いつか元気にな

って再び学校に通える様になってもらいたい、それが僕の願いなんだ」

「しかし、先輩……」

「これはね、セラピーなんだよ、治療の一部みたいなものさ、僕は今、個人的に心理学を勉強していて、いつかはちゃんとした精神科医になってたくさんの苦しんでいる人達を助けてあげたいんだ、でもその気持ちは今だって同じ、僕達看護師だって何か患者さん達にしてあげられる事があるはずだ、だから俺は諦める事なく彼女に話しかけて少しでも苦しみから解放させてあげたい、きっとそれこそが看護師の仕事なんだと僕は思っているんだ、それこそが、本当の看護だって……」

彼の看護に対する熱い情熱と決意に説き伏せられた私は、それ以上何も言えなくなってしまうしました。『看護師だって何か出来る』という言葉に感動した私は、『もしかしたら、この人ならあの子の閉ざした心を開いてくれるかもしれない』なんて期待すら覚えてしまいました。

この人は看護師の鏡、この人の元で研修を受けられる私は幸せ者かもしれない、その時は本気でそう思っていました。私もいつかこの人みたいに後から来る後輩達に尊敬されるような看護師になりたいと……。

この時、まだ私は自分がこの後に見てしまう悪夢の様な出来事など予想すらしていませんでした。いや、そんな事考えられる訳がありません。正常な神経をしている人間だったら、誰だって……。

「じゃあ、いつも通り君は向こうの病室から見回りを始めてくれ、僕は逆側から回っていくから」

彼と夜勤が一緒の時は、いつも私が右端の病室から患者さんの見回りを始め、彼が左端の病室から回っていきます。私が回る病室には年配の患者さんが比較的多く、結構手がかかる方がいらっしやいます。そりゃ私は研修中の身なのですから、勉強の為にそういった患者さんと接するのは当然です。

その患者さんの中で一人、自分で歩く事が出来ないお婆さんがいて、いつも夜中に寝る事が出来ずに履いている紙オムツに便をしてしまいます。排出用のおまるがこの病室にも設置されてはいますが、お婆さんは一人で立ち上がる事が出来ないで仕方が無いのです。なので、私はいつもこのお婆さんの紙オムツの取り替えに手間取ってしまい、次の病室への移動が遅くなつて病棟の半分以上の病室を先輩が先に見回りしてしまうのです。私はいつも三分の一を見回るのが精一杯でした。

「…………あれ？」

でも、この日はこれまでとは違いました。いつも寝ないで起きているお婆さんは今日に限ってスースーと静かに寝息を立てていて、オムツの中もまだ綺麗でした。

「…………これなら今日は、ちょっとは先輩に追いつけるかな」

少しでも成長したところを見せたかった私は、若干急ぎ足で病室から廊下に出ると先輩がどこまで回ってきているか確認しました。どうやらまだこちらまでは来ていないみたい、今日はちょうど半分ぐらいの場所で会えそうだ、私の心は小躍りしていました。

そして次の病室に入ろうとした時、私はナースステーションの横にある衛生管理室の扉が少し開いて中から照明の光が漏れているのが見えました。と同時に、その衛生管理室の正面にある個室の扉の半開きになっているのが確認出来ました。

どうやら今日は、先輩の方が患者さんの排出物の処理をしているみたい、一体先輩にそんな仕事をさせちゃっている患者さんは誰だろう、気になってしまった私は見回りの途中なのにその扉が半開きの病室に近づき、外についている名札を確認しました。

「……………あつ」

その名札に書かれていた名前はあの拒食症の彼女の名前でした。ちよつと下品な話ですが、お通じがあるという事はあの子が何かしら食事を取ってくれているという証拠。

ちゃんと先輩の熱意は少しずつでも彼女の心に届いているんだ、私はホッとして胸をなで下ろし、見回りの続きをしようと後ろを振り向いた時、その病室の中から小さな声が聞こえてきたんです。

「……………ウツ、ウツ、ウツ……………」

泣き声でした。間違いなく、あの子の泣き声。何で泣いているのかサッパリわからなかった私は、突然物凄く嫌な雰囲気を感じて静か

に開いている扉から中を覗いて彼女の様子を伺いました。

「……助けて、誰か助けて……」

ベッドの上に丸くなって座っていた彼女は、涙をボロボロ流しながら震え上がっていました。過去にも彼女が怖がって震えている場面は何度か見てきましたが、この時の怖がり方は看護経験の乏しい私が見てもあまりに異常なものでした。

「……どうしたの？ 何でそんなに震えているの？」

「……看護婦さん？ 看護婦さん！ 助けて、助けて！」

「落ち着いて！ 大きな声を出したらみんなが起きちゃう！ 大丈夫だから落ち着いて！」

駆け寄った私に抱きついた彼女は、こちらまで揺らされるぐらいにガタガタと震え上がっていました。まるで、何か得体の知れない怪物でも見てしまった様でした。今まで経験の無い出来事に、私は少しパニックに陥ってました。

「一体何があったの？ あの優しい看護師さんがあなたのお世話をしてくれているんでしょ？ それなのに、何をそんなに怖がっているの？ あなたも少しは私達に心を開いて……」

「……悪魔……」

「……えっ？」

「あの人、悪魔！　お願い、助けて！　ここから出して！　お願い！！」

このような狂言みたいな発言は精神を病んでいる患者さんには良くある事で、私も一度女性の患者さんに『殺される！』と言われた事もあります。しかし、彼女の怯え様はそれらの患者さんとは一線を画していて、私は背中に強烈な寒気を感じました。

「……先、輩？」

押し潰されそうな緊張と恐怖に襲われ、どうしていいかわからなくなった私は急いでに衛生管理室にいる先輩の元へと向かいました。しかし、それは間違いでした。その時私は決して見てはいけないものを目撃してしまったのです。

「……エへ、エへ、エへ……」

おまるに入っている排出物をピンセットで摘み上げ、大切に透明のフィルムケースにしまい込む悪魔の姿。患者さんに笑顔を振り撒いていたあの顔は虫酸が走るような下品な笑みを浮かべ、目は血走り、

開いた口元の端からは涎を垂らしている怪物の形相。私が一瞬でも心から尊敬したあの先輩の姿はもうどこにもありませんでした。

「……可愛いよ、凄く可愛い、この粘り気、この色、この臭い、今までで最高の状態だよ……」

彼女の汚物をピンセットで掻き回した悪魔は、事もあるうちにその一部を自分の舌の上に乗せると口の中を含みクチュクチュと味わい始めたのです。その光景を見た私は吐き気をもよおし、一瞬気を失いかけるほどの嫌悪感に襲われました。

「……最低……！」

目の前で行われている悪魔の儀式に耐えられなくなった私は、恐怖のあまり病棟から逃げ出し別の階のトイレの洗面台で嘔吐してしまいました。それで少し落ち着いた私は急いでその階のナースステーションに飛び込み、アドレスを調べてあの子の担当の医師に電話をしてこの詳細を話したのです。

私の内部告発で行われた緊急のカンファレンスで、先輩は正直にこの異常な行動を認めました。しかし、その後に彼から語られた虫酸が走るような真実は、私を含めその場に参加していた他の医師達も言葉を失うほどのものでした。

この悪魔は普段から幼い少女に対して異常な性癖を抱いていて、あの子の事も性の対象として見ていたらしく、嫌がる彼女にしつこく

接していたのはその為でした。

彼女が拒食症を克服して退院する事を嫌がった悪魔は、信じられない事に病棟内に下剤を持ち込むと私達に知られぬ内に彼女の食事に混ぜ、下痢をさせる事によって体重の増加をわざと阻止していたのです。

あまりに非道な欲望はそれだけでは満たされず、排出物を持ち帰っては自分の家に保存し、一目に隠れて彼女を精神的に追い詰め気力を奪い、お風呂や着替えの面倒など全ての行動を束縛しようと企んでいたのです。

彼女も最初は家族や医師、他の看護師に相談した事もあつたらしいのですが、病状から狂言と判断されてしまい、誰も信じてはくれなかったそうです。

そして、慢性的な下痢症状と度重なる猥褻な行為で肉体的にも精神的にもすり減ってしまった彼女は抵抗する気力すら失い、ただひたすらこの拷問の様な苦痛に耐えていたのです。

話によると、この悪魔の凶手にかかった子供達はすでに退院した他の患者さんにもいて、そのほとんどの少女が恐怖のあまりこの事を親にも話せなかったそうです。あの時病棟にいた他の三人の少女達も、危うくあの悪魔の犠牲になるところでした。

その後、私を信じて助けを求めてきた彼女は無事に病気を克服して元気良く退院していきました。それを見届けた私は病院を退職し、それ以来二度と看護師の仕事には就いていません。優秀なナースになりたいという夢がありました。私はあれから少し人間不信に陥ってしまい、それにまたあの様な場面には二度と出会いたくはないので……。

あれから三年経った現在、あの善人の面を被っていた忌まわしき悪魔は今も裁判所で裁きの刑の重さを争っています。出来る事なら一生外には出て来て欲しくありません。あの時見たこの世のものとは

思えない悪魔の微笑は、今も夢に見るほどの私のトラウマになってしまいました。

―完―

いつまでもいっしょ（前書き）

フッと思いついて適当に書いた短編です。

どうぞお手柔らかにお願い致します。

いつまでもいっしょ

「わー！ ママ、ママ！ キレイな海が見えてきたよー！」

「あら、翠はこういう景色を見るのは初めて？」

「うん、初めて！ 海で泳ぐの楽しみ！ いっぱいっばい泳ぎたいー！」

「そうね、後でいっぱい泳げるから楽しみにしててね？」

休日の昼下がり、私は翠を連れて車で観光地で有名な海岸沿いを走っていた。天気も快晴で、海水浴をするにはもってこい日和。助手席に座る翠は車の窓から外を覗いてニコニコしている。

「あーあ、パパも一緒だったらもっと楽しかったのになー？」

「しょうがないでしょ？ パパだってお仕事が忙しくて大変なの、そんなワガママを言っちゃダメよ？」

昭雄さんは現在海外に出張中。一流企業に就職し、着々と出世のエリートコースを歩んでいるので仕方の無い事。むしろ、愛する人が海外で働いているなんて私からすれば自慢の一つでもある。

「ママもこの前の絵里おばちゃんと同じ事言ってるー、ママはパパがいなくて寂しくないの？」

「それはママだって寂しいわよ？ でも、パパは一生懸命お仕事頑張っているんだから、ね？」

「これも絵里おばちゃんと一緒だよー？ ママとおばちゃん、本当に仲良しなんだね！」

「そうね、私達はいつでも一緒だったわ、翠もママと一緒にだと嬉しいでしょ？」

「うん！ ママだーい好き！ ママがいればパパがいなくても寂しくないよー！」

私には双子の姉がいる。『真理』と『絵里』と名付けられた私達は見た目も声も背格好も全て瓜二つの姉妹で、実の両親でさえもたまに私達を見間違えてしまうほどだった。

私達はいつも一緒だった。家でも学校でも常に二人で寄り添って行動していた。勉強する時も、遊ぶ時も、寝る時だっていつも一緒。好きな食べ物も可愛いと思う服もみんな一緒だった。

「ママいいなー、あたしも双子に産まれてきたかったなー！」

「そう？ でもね、双子って結構大変なのよ？ 一人っ子の翠にはわからないと思うけど、困っちゃう事がたくさんあるんだから」

『近所一のそっくり仲良し姉妹』と言われた私達は、進学した高校や大学も同じ学校を選んだ。でも、実際には私よりも若干姉の方が学力に優れており、私は必死になって姉に追いつこうと努力した。大学に進学した頃から次第に私と姉の差は学力だけでなく私生活にも違いが現れ始め、異性に対して少し奥手だった私はいつもお洒落で社交的な姉の後ろに隠れていた。その姿を見て、周りの人間達には『背後霊』なんて言われてしまった事もあった。

そんな時、私達は合コンで当時まだ学生だった昭雄さんに出会った。ハンサムで高学歴、そして女性をいたわる優しさを見て私は彼に一目惚れした。初めての恋だった。

「ねえ真理、私どうしても自信が持てないの、こんな地味な私にあの人が振り向いてくれるなんて……」

「そんな情けない事を言っちゃダメよ絵里！ あなただって本当はとても魅力のある女の子なんだから、自信持って告白しちゃうなさい！ 私がついてるわ、私達はいつまでも一緒よ！」

姉の励ましに推されて、私はありったけの勇気を振り絞り昭雄さんに自分の気持ちを伝えた。すると、昭雄さんは私の告白を心から受け止めてくれた。こんな私を恋人として迎え入れてくれたのだ。

地味だった私の人生は一気にバラ色に変わった。昭雄さんは私をとっても大切に思ってくれて、毎日の様にデートを重ね、二人海外に旅行に行ったりもした。将来の約束もその時交わしたのだ。

「でも、絵里おばちゃんはいつになったら結婚するのかなー？ おばちゃんもママに似て綺麗な人なのー？」

「……そうね……」

姉はそんな私達を常に影から支えてくれた。喧嘩をして私が落ち込んでいる時も優しく励ましてくれて、代わりに昭雄さんに対して怒ってくれたりした。友達の人々と一緒にいる時も、私と昭雄さんが仲良くしているのをニコニコしながら見守ってくれていた。私は姉に感謝した。姉と双子として産まれてこれた事を心から幸せに思った……。

「ねーママ、どんどん海水浴場から離れていくよー？ どこまで走っていくのー？」

「……人がいない、もっと空いている所よ……」

だから、許せなかった。姉が私を利用して、裏で着実に昭雄さんと交際を重ねていたなんて、信じられなかったし信じたくなかった。昭雄さんから言われるまで、そんな事夢にも思わなかった……。

「絵里、ごめん、実は俺、真理さんと……」

私が昭雄さんと交際を始めた直後から、姉は私に隠れて昭雄さんと会っていた。内気でつまらない私より明るくて一緒にいると楽しい

姉を選んだ昭雄さんは表向きでは私が恋人の振りをして、本当は姉と共に人生を歩んでいく事を選択したのだ。

それでも私は愛する彼の事を憎む事が出来なかった。嫌いになる事が出来なかった。私のやり切れない苦しい思いは、悔し涙を流す私を無視する様に幸せな挙式を挙げ子供にも恵まれた姉への恨みに変わっていった。

「返して！ 私の幸せを返して！！」

だから、私は『真理』を殺してこの海岸の海の底に沈めた。姉さえこの世からいなくなってくれば、きっとあの人は再び『絵里』の元へと帰ってきてくれるはずだ。今度こそ、私はあの時二人で交わした約束通り昭雄さんと一緒に幸せな家庭を築いていけるんだ……。

「ねーママ！ まだ走るの？ 一体どこまで連れて行ってくれるの！？」

その為には、まだ消さなきゃいけない邪魔者が一人いる。

「あなたの大好きなママの所よ、いつまでも一緒にしてあげる」

ー完ー

記念日（前書き）

前の『いつまでもいっしょ』から連想して書いてみた短編です。

記念日

「ねえ、今日はあなたと私の一周年の記念日よね？　愛を込めて、あなたが一番欲しがっている物をプレゼントするわ」

同じ会社の職場に勤める裕子とは、もうかれこれ六年間の不倫関係になる。彼女はいつも二人が結ばれた日に、毎年姑息なプレゼントを一言添えたメモと一緒に私のデスクの引き出しに忍ばせてくる。

五年前は当時喉から手が出るほど欲しかった最新型のiPod。並んで買う時間の余裕が無かった私にとって、このプレゼントはとても嬉しかった。

「ねえ、私はあなたに愛されている事がとても幸せだわ、いつまでもずっと私の側にいてくれるわよね？　変わらぬ愛を込めて、今年もあなたが一番欲しがっている物をプレゼントするわ」

四年前は当時興味のあったオープンしたばかりのデイズニーシーのペアチケット。もちろん、裕子と一緒に行った。年甲斐もなく、とても楽しかった。妻には罪滅ぼしのつもりで大きなミッキーのぬいぐるみを買って帰った。

「ねえ、どうして最近私との時間をあまり作ってくれなくなったの

？ 仕事が忙しいのはわかるけど、やっぱりあなたとあえないのは寂しいわ、私の頭の中は寝ても覚めてもあなたの事でいっぱいなのよ？ その一途な愛を込めて、今年もあなたが一番欲しがっている物をプレゼントするわ」

三年前は当時流行っていたネックレス型のパールツクのシルバーリング。確かに以前私が欲しがって物だったが、私のイニシャルが刻まれているそのリングは裕子のイニシャルが入ったリングとシルバーのチェーンで執拗に何重も巻かれていた。この頃から、私は彼女の束縛が少々怖くて不快になっていた。

「ねえ、私はもう四年間もずっと待っているのに、どうして奥さんと別れて私と一緒にしてくれないの？ このまま私の事を遊びにして捨てるつもりなの？ そんなの嫌よ、お願い、私を一人にしないで？ 私の全身全霊の愛を込めて、今年もあなたが一番欲しがっている物をプレゼントするわ」

一昨年は引き出しの中全体に一千万円の札束が敷き詰められていた。裕子がこれまで蓄えてきた貯金の全額だった。当時、私は会社の不景氣に加え家や車のローンなどで金銭的に困っていたので、彼女との関係が続ける約束でその金を受け取ってしまった。

「ねえ、喜んで？ 私、ついにはあなたの念願の夢を叶えてあげる事が出来たのよ？ あなたが奥さんとの間に今まで恵まれなかった、神様からの私達への贈り物よ？ 二人分の愛を込めて、今年もあなたが一番欲しがっている物をプレゼントするわ」

そして、去年は真新しい母子手帳と共にすでに私と妻の名前が書き込まれた離婚届が入っていた。どうやら、裕子は私の知らない内に避妊具に細工をして、私の子供を妊娠してしまったらしい。私は責任を果たす為に中絶費用と共に、妻と離婚する意志が無い事、それと最後の別れの言葉を彼女に伝えた。

次の日から、裕子は私の目の前から姿を消した。会社も辞職し、いつも二人で会っていたマンションの部屋ももぬけの空。携帯電話も一切通じなくなって、彼女の行方は一切わからなくなってしまった。

「部長！ 奥様、ご懐妊されたそうですね！ おめでとございます！」

あれから一年たったあの記念日の日。私は仕事の成果を買われ部長に昇格し、ギクシヤクしていた夫婦の仲も改善して待望の子供を授かった。現在、妻は妊娠三ヶ月。最近是新婚当時の様に私の帰りを首を長くして家で待ってくれている。家と車のローンの目処も立ち、私の人生は最高の絶頂期を迎えていた。

しかし、突然失踪してしまった裕子の消息は今もわからずじまいだった。家族からも搜索願いが出され、警察が必死になって彼女を搜索しているみたいだが、もうすでに自ら命を絶ってしまっている可能性が高いらしい。

「……裕子、すまない、私を許してくれ……」

私は心の中で裕子に謝罪すると、職場の部室で一番大きなデスクに腰をかけて引き出しを開けた。そこには、綺麗にリボンのラッピングがされた小さな箱が一つ、メモと共に置かれていた。

「ねえ、あなたと私が永久の愛を誓ったこの記念日に、やっと二人の長年の願いが叶う時が来たのよ？ 私からの永遠の愛を込めて、今年もあなたが一番欲しがっている物をプレゼントするわ」

その箱の中には、私との結婚指輪をはめたままの状態で刃物で千切られた血まみれの妻の薬指が入っていた。

―完―

白い糸くず（前書き）

小説のネタを探していた時に、ふと興味深いものを見つけたので書いて見ました。

白い糸くず

夜中でも気温三十度を超える真夏の熱帯夜、四畳半のワンルームマンションの部屋の中で青年はベッドに横たわりうなされていた。

三日前から突然襲いかかってきた謎の高熱のたるさと下痢による腹痛、各関節の激痛、そしてそれらの痛みすらも忘れてしまうほどの手足や背中、顔など体中全身の痒み。

高校時代に野球部で体を鍛え、健康には自信を持っていた青年はそれらの症状を『夏風邪の一種』と思い込み病院で診察を受ける事を面倒くさがってしまい、そのまま放置してしまった。

それにより、今に至っては外出する事はおろか、足の関節の痛みでまともに歩く事すらままなくなってしまった。食べ物も喉を通らず、無理をして押し込んでも下痢をするか口から吐き出してしまいう状態。

青年が唯一出来る事は洗面所まで虫の様に這いずり、水を汲んで飲む事とベッドで寝る事、それと手で痒い箇所をかきむしる事ぐらいだった。

「……痒い、痒い……」

特に全身に広がった痒みは経験の無い異常なものだった。体の異変

に気づいたのは一週間前、両足の太ももに赤い発疹の跡の様なものが数個現れたのが始まりだった。

その赤い発疹は次第に太ももから足全体に広がり、いつしか腕や胴体や背中や首、そして顔全体にも現れるようになり、最初は蚊に刺された程度だったものがいつしか皮膚の上を虫が這い回っている様な酷い痒みに変わっていった。

「……寝れない、痒い、痒い……！」

青年はその気色の悪い感覚に我慢出来ずに体中をかきむしり、それによつて皮膚は真つ赤に爛れて皮が捲れ、その傷口からは水分と血が滲み出していた。最初に異変を感じた両足は水が溜まったみたいにくんで腫れ上がり、あちらこちら真つ青になって内出血を起こしていた。

この様な全く身に覚えの無い異様な病状に、青年はいよいよに恐怖感を抱くようになった。しかし、体が思う様に動かず病院に行く事も出来ない。困り果てた末、青年は実家の両親に電話をかけ助けを呼び、明日一緒に診断を受けに行く約束を取り付けた。

「……痒い、痒い痒い痒い！」

あと一日我慢すれば病院に行かれる、今日はもうこのまま眠ってしまおう、そう決意して横になり目をつぶった青年の睡眠を妨害する様に全身の痒みと痛みはさらに進行していき、腫れ上がっている足

の皮膚をガリガリとかきむしる。

「……ん？ 何だ、これ……？」

その時、手の指に感じた妙な違和感。暗い部屋の中で僅かに窓から入ってくる月明かりを頼りに指の爪を見ると、引っ搔いた爪の間に短い白い糸の様なものが挟まっていた。

それはやつと指で摘めるほどの小さなもの。糸状とはいえ、布などの乾いた糸とは違い何やら少し弾力のあるネバネバとしたものだった。指で丸めると球体になり、潰すとプチッと簡単に潰れた。

「……皮膚が捲れたものかな？ 一体、俺の体はどうなってしまったんだ……？」

すると、今度は背中全体に何かが這いずり回っている様な不快な感覚が青年に襲いかかってきた。その感覚に気味が悪くなり痛む体を何とか起こし、ベッドの横に置いてあるデスクライトを点けた瞬間、青年は目の前に広がる身のよだつ光景に驚き絶叫した。

「……う、うわああああっ!!」

青年の異常なほどに腫れ上がった両足の上と、その下のベッドのシートの上に大量の白い糸くずの様なものがビッシリと広がっていた

のだ。驚き慌てふためいた青年は両足にへばりついている糸くずを手で払いのけると、逃げるようにベッドから床に転がり落ちた。

「……何だよ！？ 一体何なんだよこれは！？」

痛みと痒みが酷かった両足はパンパンに膨れ上がり、すでに膝を曲げる事が出来なくなるほど悪化して捲れて爛れた皮膚はまるで象の皮膚の様に縮れて真っ黒く変色してしまっていた。

そして、ベッドのシーツに大量に湧き出た白い糸くずは良く目を凝らすと微妙にクネクネと動いていて、それはまるでウジ虫のものに良く似ていた。大きさ、長さは各それぞれ全てバラバラで、中には先ほど丸めたような球体になっているものもあった。

「……こんなもん、どこから湧いて来たんだよ！？ 俺の周りで何が起こってるんだ！？」

興奮したせい、今度は強烈な吐き気が青年を襲ってきた。何とか堪えて洗面所まで肘を使って這いずり、激痛の走る両足を腕で支えながら立ち上がり洗面台に嘔吐物を吐き出した。

「……ゲフツ！ ゴホツ、ゴホツ……！」

苦しみから少し解放されホツとして目を開けると、衰弱仕切った青

年の目に想像を遙かに超えたものが飛び込んできた。三日間何も食べれずに空のはずの胃腸、無色透明の嘔吐物の中に何やら小さな白いものがいくつかあるのが確認出来た。

「……何で、何でだよ!? 何で俺の中から……!?」

その白い物体は、あのベッドの上に広がっていたあの白い糸くずと同じものだった。それらは洗面台の中でクネクネと動き回り、意志を持っている様に洗面台に張り付いて斜面を登り外に出ようとしていた。

「……あ、ああ、ああああ!!」

青年を恐怖に陥れたのはそれだけではなかった。洗面所の鏡に写る自分の顔、酷いニキビの様に発疹が吹き出している皮膚の下に、何かが蠢き移動しているのがわかった。それは顔だけではなく、かきむしり爛れた腕や足、体中の皮膚に現れていた。

「……気持ち悪い、気持ち悪い気持ち悪い! 痒い痒い痒い痒い!!」

洗面台から手を離して倒れ込んでしまった青年は、錯乱してその何かが蠢いている皮膚を思いつ切りかきむしった。すると、その腫れ上がっていた皮膚が捲れた下からは水分と共にあの白い糸くず状の

謎の生き物が大量に噴き出してきた。

そう、ベッドに湧き出した白い糸くず状のものは全て青年の体の中から湧き出てきたもの、寝ていて背中を這いずり回っていると感じた感覚は、皮膚の下で蠢いていたものだったのだ。

「……助けて、誰か助けてくれえ!!」

ついには、白い糸くず状の生き物は足や腕の肉と皮膚を食い破り頭を出して、青年の体中を這いずり回り始めた。とてつもない激痛と悪夢の様な光景に青年は気を失い、その場に倒れ動けなくなってしまう。

翌日、マンションを訪れた母親により、青年は息絶えた姿で発見された。健康そのものだった体は骨が浮き上がるくらいにやせ細り、皮膚はズタズタに爛れて黒く変色し壊死していた。そして、青年の体中には大量の白い糸くず状のものが這いずり回っていたという。

警察により回収され解剖を行った結果、青年を死に至らしめた原因と、謎の白い糸くずの正体が解明された。死因は、『寄生虫の感染における全器官の食害による衰弱と壊死』、病名は『芽殖孤虫症』と発表された。

『芽殖孤虫』（がしよくこちゅう）、読者の皆様はこの名前を聞い

た事があるでしょうか？ それは生物の体内に巣くい成長していく寄生虫の一種。れっきとした生き物の一つです。

普通、寄生虫とは生物が卵のついた物を摂取、または接触により皮膚から口などに移り体内に侵入して卵から幼虫になります。そして、その生物の中で栄養を取り成長して、糞やその生物を摂取した別の生物に移り渡って最終的に辿り着く生物の中で成虫となります。

有名なサナダムシなどほとんどの寄生虫は幼虫時代を過ごす『中間宿主』と成虫として完全する『最終宿主』のルートが解明されていて、成虫となったものは宿主との共存の為にプラスに働くものもあるそうです。

しかし、『寄生虫』と言う名の悪いイメージの様に、中には潜伏する生物に対し悪影響を与える危険な虫も存在していて、人体に巣くう有名な虫にはアニサキスやエキノコックスなどがあります。

その中でも、最も恐ろしい寄生虫として記録されているのが『芽殖孤虫』です。

先ほども挙げた通り、ほとんどの寄生虫は感染ルートが判明している為、未然に防ぐ事が可能です。しかし、この芽殖孤虫は現代の医学や知識でも謎の部分が多く、確実な感染ルートや感染しやすい生物の種類、地域などがはっきりしていません。

しかも、最終宿主となる生物もまだ確認されてなく、孤虫（幼虫）の名の通り成虫に進化した姿を発見されていないのです。人間の体も、彼らにとっては幼虫時代を過ごす中間宿主でしかありません。大きさは一センチに満たないものや約十センチほどの白い糸くず状、あるいはアメーバ状や球体状などと正式な姿すらも未だにわかっていない気色の悪い謎の寄生虫。

この芽殖孤虫が一度人体の中に侵入すると、彼らは自らの成長の為に幼虫移行症を引き起こし各部首の軟部や皮膚下、臓器や骨などを

食害し、とてつもないスピードで分裂を始め数を増やしていきます。そして、いつしか体内全体に侵食し人体に頭痛、発熱、下痢、炎症、血管破裂、臓器不全、言語障害といった様々な悪影響を引き起こし、最後は宿主の命までもを脅かすようになるのです。

現在、この寄生虫を駆除出来る薬剤や治療法はありません。唯一の手段として手術による摘出がありますが、分裂による進行スピードが早い為全てを摘出する事はまず不可能なのです。

現在の感染例は世界中で十四件と非常に少ないものですが、その内の六件は日本で発見されています。感染した原因は全て不明、感染者の共通点も全てまばらで年齢も二十代から七十代まで差があります。

そして、その全ての感染者の中で救命された例は一つもありません。つまりは感染したら最後、寄生した人間を確実に死に至らしめる恐怖の寄生虫なのです。

この寄生虫が初めて発見されて約百年間、医学界で様々な学者によって研究解明が進められています。が、まだそれと良く似た生態系の寄生虫を見つけ、そこから治療の打開策を練る段階までしか至っていないのです。

我々人間の唯一の救いは、この芽殖孤虫による感染者の例が極めて少なく、めったに感染しない希な病気だという事だけです。しかし、もしかしたら私もあなたもいつかこの寄生虫に侵される可能性がゼロという訳ではないのです。

「……痒い……」

あなたは、原因不明の体中の皮膚の痒みに感じていませんか？
そして、原因不明の高熱や下痢などの体調不良に襲われていませんか？

そして何より、あなたの周りに謎の蠢く白い糸くずを見た事がありますか……？

ー完ー

男のホラー2008（前書き）

……おまけです。
後書きと思って戴けると幸いです。

男のホラー2008

「おいおいミラージュさんよ？ 春のアノ企画であれだけはやっちゃけたお前さんが、何を真面目にホラーなんて書いてんの？」

「お前にホラーなんて無理無理！ どうせつまんねーんだからいつも通りの馬鹿な小説書けよ！」

「色々期待してるぜ、ミラージュ！」

そうでしょう、そうでしょう。皆様の仰られる通りでございます。

確かに、私にはホラー小説なんぞ全くもって無理難題でございました。所詮はくだらない下ネタコメディーしか書けない三流なろう作家、だったら最後くらいは自分らしくハメを外してみようじゃありませんか。

題して、ミラージュ『男のホラー2008』！

男には、決して女にわからない様々な恐怖が何気ない生活に潜んでいたりするのです。

そんな全身の毛が逆立つような恐怖体験を自分自身や他人の経験談からいくつかチョイスしてみました。

読んで下さっている読者様に共感して戴けると恐縮です。

まずは、青春時代に良くありがたなこんな場面。

「ベッドの下に隠していたエッチな本が、綺麗に机の上に置かれていた時」

エエエエエエエエツツツ！！！！

お母ちゃん、勝手に俺の部屋掃除すんなよ！！

俺が学校に行ってる時は部屋に入るなっっていつてんだろお！！！！

ありますねー、こんな事。母親としては愛する息子の為を思ってる行動だったとしても、やられた本人はたまったもんじゃありません。しかも、帰ってきた時に母親が『……あら、お帰り……』なんて白々しい態度取られるとダメージ増大。先に帰ってきた他の家族にまで見られたらもう家出するしかないですね。

似たようなパターンで、さらにキツイものをも一つ。

「姉や妹などの近親系のエッチな映像見ているのを、実の姉妹に見られた時」

うわああああああああ！！！！

違うの違うの違うの、そういう事じゃなくてあのそのだからね！？

ちょっとした好奇心で覗いてしまった禁断の世界を、ものの見事に
見られてしまう。『ねえねえ、お兄ちゃん！』なんて笑顔でノッ
クせず部屋に入ってきた妹の表情があつという間に青ざめていく光
景は正に地獄絵巻。

家族全員で食事の時間も埋める事が出来ない一定の距離を置かれ目
も合わせて貰えない。それどころか、風呂に入る時も異常なほどに
警戒され、学校の友達には変態兄貴呼ばわりされる始末。言い訳な
んて一切通用致しません。

エッチ系の話だと、こんな意外な恐怖も日常生活に隠れているので
す。

「仲の良い男友達にオススメのＡＶ女優の名前を教えたら、『あ、
その女優さんこの前自殺したらしいよ』って言われた時」

うぎゃあああああああ！！！！

買っちゃったよ！

DVD買っちゃったよ！！

もう怖くて見れねー！！！！

困りますねー、知らなくても良かった新事実。こうなっちゃうと見
る事も使う事ももちろん、捨てるのも何か罰が当たりそうでは出来な
くなってしまう。

えっ？ 『使う事』ってどういう意味？ と、思ったお子様は是非
ご自分達のお父様に聞いてみて下さいませ。きっとその時、お父様
は最高のスリルとホラーを体感する事が出来るでしょう。

女性からしたら良くあるたわいのない事、しかし、男性からすると鋭い刃物を突きつけられている様な恐怖を覚える場面もあります。

「コンビニで偶然見つけた付き合って一ヶ月の自分の彼女が、雑誌売り場で大真面目に『ゼクシィ』を立ち読みしてた時」

ちよちよちよちよちよ！！！！

気が早い気が早い気が早い！！

しかもあんな分厚い雑誌を片手で持って立ち読みしてるう！！！！

怖いですねー、あの雑誌。あと、たまごクラブにひよこクラブ。下手に婚姻届や母子手帳持つてこられるより恐怖です。しかも、あれつてハンパなく重たい雑誌なので、あんなで頭叩かれたら首が鞭打ちになりそう。

男は全ての事を大体大まかに見通す生き物なので、リアルな現実を突きつけられてしまうとドン引きしちゃうんです。あと、『中に出て』も禁句。普通萎えます。何を中に出すのかって？ お父様に聞いてみて下さいませ。

最後は、近くにあったから寄っただけなのにそこに入ってしまった事により恐怖を感じてしまうこんな場面。

「用を足そうと急いで駆け込んだ公衆便所が、実は有名なハッテン

場だった時」

アッーーーーー!!!!!!

何でガチムチの兄貴達が俺の後から次々とトイレの中に入ってくるの!?

お尻はダメ!! お尻はやめてえええええ!!!!

……怖いですねえ、一番怖いですねえ。夜中の公衆便所、叫び声をあげても誰も助けは来てくれません。それどころか、気持ちの良い思いをしていると勘違いされてしまうかもしれません。

皆様、くれぐれも用を足す時はズボンやパンツまで下に下ろさないようにご注意ください。えっ? 自身の経験談かって? ある訳ねーだろ! 自分は神に誓って生粋のバージンヒップだったの!!

と、いう事で、短い内容でしたがご堪能して戴けましたでしょうか? これ以上ハメを外すと、さすがに企画の概要から飛び出し作品削除されてしまうかもしれないので……。二企画連続で隔離部屋行きは勘弁して下さい……。

また、皆様とは別の作品でお会い出来ると幸いです。つーか、懲りずに読んで下さい。どうかお願いします。無視しないで下さい。一人にしないで下さい。置いていかないで! 暗いよ、狭いよ、コワイよー!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7131e/>

夏ホラー2008短編集あれこれ

2010年10月10日16時18分発行